

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第674号 平成26年1月20日

ペットボトルが電球に？

「必要は発明の母」というのは、この事かをつくづくと感じます。

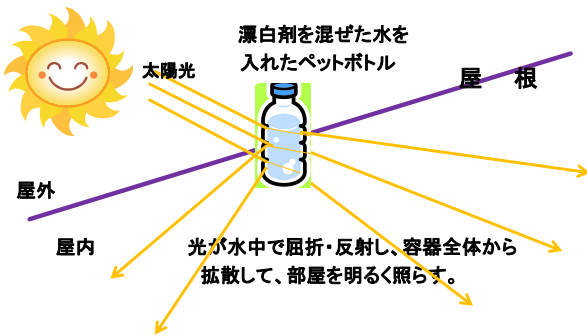
ペットボトルで太陽光を集め「電球代わり」にするというユニークなアイデアは、まさに、日々の生活の不便さを解消する為に生まれたアイデアで、発案者の名前を取って「モーゼルランプ」と呼ばれています。そして、そのランプは今、アジア各国で貧しい家庭の生活を明るく照らしています。

これは、平成25年12月23日付の朝日新聞に掲載されていた記事ですが、これを基に、「モーゼルランプ」について紹介したいと思います。

この「モーゼルランプ」を発案したのは、ブラジルで自動車の修理講師をしているアルフレッド・モーゼルさん（62歳）です。

頻発する停電に閉口していたモーゼルさんは、ある日、妻の親戚宅で雑談していてハッとしました。それは、窓から差した光が、テーブルに置いたペットボトルを通して乱反射し、テーブルや壁を照らしていたからです。そこで彼は、早速、

モーゼルランプの仕組み



清涼飲料水のペットボトルに水を入れ、ガレージの屋根に穴を開け取り付け付けたところ「こんなにも明るいのかと驚いた」そうです。晴天時は60ワット電球程の明るさといえますから、かなりのものですね。

朝日新聞の記事では、フィリピンの首都マニラ近郊のサンペドロ市の生活保護地区で、レンガやブロックを積み上げ、板やト

タンを被せた家が長屋の様に並び様子が紹介されています。

そこに住む、6人家族のグロリア・モレスさん（47）の家は間口が3メートル程で窓が有りません。家には蛍光灯があるそうですが、電気代が夫の日当の4日分にも相当する為、出来るだけ電気を使用しない様になっているのだそうです。この為、部屋の中は昼間でも玄関のドアを開けておかないと真っ暗という不便な生活を強いられていたそうですが、3年前、地元のNGOの協力で「ペットボトル照明」を寝室と納戸に設置したところその暮らしは一変し、末っ子のマークくん（12）の「探し物がすぐ見つかるようになった。家で宿題もできる」という喜びの声を紹介して

います。

「モーゼルランプ」は、発明というには余りにもささやかなアイデアかも知れませんが、でも、貧しい国々の人々にとっては、そうした日々の生活に密着した工夫改善が求められているのだと思います。日本はODA等を通じて開発途上国への支援を行っていますが、忘れてはならない視点だと思います。

さて、日本で生活していると、昼間なのに、窓もない暗い部屋で不便な生活をしている、そうした貧しさにリアリティを持たない方々は少なくない事でしょう。しかし、それが世界の現実であり、その現実を直視すると共に、日本で生活している事に感謝する必要があると思います。

私達は、福島第1原子力発電所の事故以来節電に気を付ける様になりましたが、それでも依然として、電気や水には不自由する事の無い日々を送っています。しかし、地球を広く見渡せば、その当たり前の事が当たり前でない生活を強いられている人々の如何に多いかという事に、思いを致さなければなりません。

(塾頭：吉田 洋一)